



書
評

窪田忠夫（著）

急性腹症の診断レシピ 病歴・身体所見・CT

池上徹則

倉敷中央病院救命救急センター救急科主任部長

窪田忠夫先生の新刊は相変わらず刺激的で、読み進めるうちに何度も納得してうなずきました。まず冒頭の「序」では、「腹痛の原因を検索するのにCTがとても有用だから」「病歴聴取と身体所見は診断しようとして行われていない」という記述が目に残ります。これはきっと、指導する立場の先生方が常日ごろからお感じになっていることでしょう。

腹部診療は、解剖が複雑な上にさまざまな主訴を時間軸と掛け合わせて考える必要があります。初学者に限らず苦手をしている人は多いと思います。そのような中、著者は腹痛を、上腹部痛、下腹部痛、腹部全般痛の3つのカテゴリーに分けて考えることを提案します。そして重要な鑑別疾患を列挙する一方で、「鑑別に挙げなくてもよい」と言い切る疾患に関しては、「どうしてそうなのか」を丁寧に解説していきます。例えば、多くの類書では「主訴：腹痛」で鑑

別疾患を挙げる際に、本当に重要な「主訴」と、腹痛はあるが「主訴」とまでは言えないものが混在している場合があります。本書では、肝膿瘍を例に挙げて、この点を詳しく説明しているのですが、非常に納得しやすいです。その後、年齢、性別、基礎疾患を軸に話が進みますが、それは熟練した外科医がベッドサイドで所見をひもといて解説するような丁寧さであり、数々の至言にあふれています。

著者は急性腹症の診療に関して、「診察をいくら詳細に詰めていっても1回のCTでカタが付いてしまうので、病歴聴取や身体所見をとることが形骸化している」と問題提起しています。実はこれは、呼吸不全や意識障害など他の重篤な病態についても当てはまり、急性期初療全般の問題点を言い当てていることに気付かされます。そして、それでも「CT全盛の現代に古典的ではある

が、急性腹症においては病歴聴取と身体所見から初期診断を行う意義はいまだに大きい」と結論を導きます。

このように記載していくと堅苦しい印象を持たれるかもしれませんが、しかし、本書の語り口はソフトで、随所にさりげなく記載されている「医者はどこだ」「NOMIがラスボス」などのコラム的な記載に、読者の皆さんはドキッとしたり、くすっとさせられたり、「そうだそうだ」と納得したりするでしょう。そして、読み進めるうちに、気が付けばきっと本書に記載されているアプローチを試してみたくなるはずです。腹痛診療が苦手と思っている研修医の先生方に、また彼らを指導する立場の先生方にも本書をお薦めします。

●A5/頁 320/2023年 03月

定価：4,950円

（本体 4,500円＋税 10%）

[ISBN978-4-260-04974-0]

医学書院 刊